（ R04 様式　4 ）

令和　5　年　2　月　22　日

教　育　長　様

代表者	校 園 名：	大阪市立本田小学校
	校園長名：	今村　友美
	電　　話：	06-6581-1531
	事務職員名：	喜連　尋滋
申請者	校 園 名：	大阪市立本田小学校
	職名・名前：	教諭・佐野陽平
	電　　話：	06-6581-1531

研究コース	
Ａ　グループ研究Ａ	
校園コード（代表者校園の市費コード）	
561155	
選定番号	A108

令和４年度　「がんばる先生支援」研究支援　報告書

◇令和４年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	Ａ　グループ研究Ａ	研究年数	新規研究（１年目）
2	研究テーマ	対話が深まる学びを創出する授業・教材の開発			
3	研究目的	本校では、これまで逆向き設計論、パフォーマンス課題、一枚ポートフォリオ等の研究を実践してきた。しかし、全教員で本校児童の実態を分析したところ、「対話」という点において育成すべき３つの力が明らかになった。 「確かな自分の考えをもつ力」「自分の考えを明確に伝える力」「他者の考えや思いを受け止める力」これらの力をもった「互いを認め合える本田っ子」をめざす子ども像とし、対話が深まる学びに焦点を当て、次の研究を推し進めていく。 ①対話が深まる学びを実現することで、児童が問題解決に向けて多角的に思考できるようにする。 ②教員の授業力向上　知識・技能に重点を置いた授業から学びの深まりを創出する授業へ転換する。 ③児童に「対話」の必要性や「対話」そのものへの気付きをもたらす教材を開発する。 ④地域の方々、専門家といった他者との「対話」を通して、「対話」に対する思考力を育む。 ⑤実践事例の作成による次年度以降の研究の土台をつくる。			
		いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。（MSｺﾞｼｯｸ 9.5ﾎﾟｲﾝﾄ）			

4	取り組んだ研究内容	○「対話が深まる」の定義づけと授業実践 ○教員の学びを広げ、深めるための講演会の実施 １.「お互いを認め合い深め合う姿」について検討し、評価基準を定めた。 ２．授業で「対話」をどのように位置づけるかを検討しながら、全員が研究授業を行った。その中でも、講師を招聘して実施したものについて記す。 7月6日　１年　生活科　「安全な水遊びの仕方」 （講師：大阪教育大学附属池田小学校　安全主任：森光　利海　教諭） 9月14日　５年　社会科　「水産業のさかんな地域」 （講師：関西学院大学初等部　社会科主任：宗實　直樹　教諭） 10月26日　６年　体育科　「ハードル」 （講師：奈良教育大学　保健体育講座：宮尾　夏姫　准教授） 11月30日　１年　国語科　「スイミー」 （講師：池田市立石橋小学校　河合　啓志　教頭） 1月25日　６年　社会科　「アジア・太平洋に広がる戦争」 （講師：大阪市立明治小学校　大阪市社会科研究部員　永井健大　教諭） 研究授業後の討議会では、それぞれの講師から教科の特質に応じた対話の在り方についてご教授いただいた。 ○「対話が深まる」に着目した公開授業研究会の実施 10月21日（金）公開授業研究会を実施した。公開した授業、講演について記す。 １年　生活科「たのしい　あき　いっぱい」　４年　体育科「アルティメット」 ５年　道徳科「ヘレンと共に～アニー・サリバン～」　６年　社会科「戦国の世の統一」 講演「対話の深まりから学びの深まり」（大阪教育大学：銭本　三千宏　特任教授） 本校の研究について、参会者の先生方から多くのご意見をいただいたことで、その後の研究に新しい見方が加わった。また、講師のご教授は、対話の際の児童の見取り方について再考する機会となった。 ○「対話が深まる」につながる価値のある体験活動の実施（各学年の必要時期に実施） 例　６年生　・裁判員を経験された方、被爆体験伝承者の招聘など ○教員の授業力向上をめざした先進的研究校の視察及び研修会への参加 京都教育大学附属桃山小学校、福岡教育大学附属小倉小学校　他5校 視察日の翌月に、校内で視察内容についての報告会を実施した。 ○対話を促進させる学習材・協働学習支援ツールの活用 発表用ホワイトボードや円形型ホワイトボードを活用して、授業を実施した。これらを活用して討議会や校内研修を実施したことで、議論が活発化し、教員の授業力向上につながった。

研究コース	Ａ　グループ研究Ａ	選定番号	A108
代表校園	大阪市立本田小学校	校園長名	今村　友美

<table>
<tr><td rowspan="4">5</td><td rowspan="4">研究発表等の日程・場所・参加者数</td><td colspan="5">研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。</td></tr>
<tr><td>日程</td><td>令和　4　年　10　月　21　日</td><td>参加者数</td><td>約　20　名</td></tr>
<tr><td>場所</td><td colspan="3">大阪市立本田小学校</td></tr>
<tr><td>備考</td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td rowspan="4">6</td><td rowspan="4">成果・課題</td><td colspan="4">大阪市教育振興基本計画に示されている、<u>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</u>および<u>教員の資質や指導力の向上</u>について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。</td></tr>
<tr><td colspan="4">【見込まれる成果１】
対話が深まる学びの実践を通して「確かな自分の考えをもつ力」「自分の考えを明確に伝える力」「他者の考えや思いを受け止める力」を育成する。
《検証方法》
本研究についての児童アンケート「授業中に自分の考えを持てましたか」「自分の考えは友だちに伝わっていると思いますか」の項目について肯定的な回答を80%以上にする。
〔検証結果と考察〕
２月に実施した校内調査では、「授業中に自分の考えをもつことができていますか？」に対する肯定的な回答92%、「自分の考えや意見を話したり、書いたりして表現することはできていますか？（校内で質問項目を検討した後、左記のように変更。）」に対する肯定的な回答88%であった。
年間を通じて、教員全員で児童の対話の充実を意識しながら授業実践に取り組んだ成果と考える。また、発話が難しい児童には、自分の考えをノートやタブレット端末など個に応じたツールを活用するように促したことが、多くの児童の自信につながったと考える。そのほかに、個々の児童の考えにズレを生む発問についての研修を行ったこと、対話を促すためのツールの活用も成果につながったと考える。</td></tr>
<tr><td colspan="4">【見込まれる成果２】
研究授業、校内研修等を通して、教員の資質や指導力を向上させるとともに、研究授業、校内研修等を通して、知識・技能に重点を置いた授業から、学びの深まりを創出する授業へと転換する。
《検証方法》
教員のアンケート項目「今年度の研究は自分の授業力向上につながった」「今年度の研究は、自分の教育観の見方・考え方を広げるものであったか」で肯定的割合を80%以上にし、「今年度の研究を通して、どのような力がついたか」「今年度の研究を通して、次年度以降、新たに挑戦したいと思う実践は何か」で具体的に記述する内容を80%以上にする。
〔検証結果と考察〕
教員のアンケート項目「今年度の研究は自分の授業力向上につながった」について肯定的な回答が91%、「今年度の研究は、自分の教育観の見方・考え方を広げるものであったか」についての肯定的な回答が91%であった。「今年度の研究を通して、どのような力がついたか」「今年度の研究を通して、次年度以降、新たに挑戦したいと思う実践は何か」に対する記述は100%であった。具体的には、下記のような回答が見られた。
・対話を深めさせる、また意欲的にさせるためにも、学習のゴールを児童も教師もしっかりもつ必要があるということが分かった。
・子どもたちが意見を出し合う方法や認め合える環境がそれぞれ違いいろいろなパターンを知ることができた。
・授業の中で「対話」を重点に置いた。今までは形骸化し、することが目的化していた対話。その意味を再考し、価値を実感できた。
・子どもの『なぜ？どうして？』が引き出せる授業にしていきたいです。
・児童同士が互いに支え合い、伝え合う中で「できた、わかった」を実感できるような体育科授業に取り組みたい。
・ＩＣＴ機器を上手く取り入れていけるような授業にも挑戦してみたい。（高学年のように、ノートの選択のような児童にあったやり方など）</td></tr>
<tr><td colspan="4">【見込まれる成果３】
地域やゲストティーチャーと連携した活動や、人・自然・文化（もの）との関わりを通した豊かな体験活動が児童の学習意欲を高め、対話が深まる学びにつながるようにする。
《検証方法》
本研究の実践前後で、児童アンケートを実施し、「見学をしたり、実物を体験したりする活動は好きですか。」「地域の方々や専門家の話を聞いたり、質問したりする学習は、自分の成長につながっていると思いますか」の項目で、5ポイント以上上昇させる。
〔検証結果と考察〕</td></tr>
</table>

		はじめの校内調査では、「体験や見学、専門家から話を聞く活動を通して、芸術・スポーツ・文化・伝統などを学ぶことができていますか。（校内で質問項目を検討した後、左記のように変更。）」の質問に対して、肯定的な回答が86%だったのに対して、２月の校内調査では92%に向上していた。全学年で、さまざまなゲストティーチャーを招聘してお話をいただいたり、実物を用いての授業を何度も重ねたりしたことで、児童が実感を伴いながら学習に取り組む機会が増え、成果につながったと考える。

研究コース	Ａ　グループ研究Ａ	選定番号	A108
代表校園	大阪市立本田小学校	校園長名	今村　友美

6	成果・課題	【見込まれる成果４】 本研究が、大阪市各校の研究の一助となる。 《検証方法》 公開時のアンケートで「本校の研究は、参考になったか」の項目で肯定的割合を80%以上にする。 〔検証結果と考察〕 「研究発表会や公開授業での説明や資料、教材は、わかりやすいものでしたか。」「研究発表会や公開授業で、自分の知識を深めたり、新たな発見がありましたか。」「研究発表会や公開授業で得た知識や気づきは、今後の実践に活かすことができそうですか。」の質問に対して、肯定的な回答が100%であった。
		【見込まれる成果５】 《検証方法》 〔検証結果と考察〕
		【研究全体を通した成果と課題】　具体的に記載してください。 ＜成果＞授業構想における変化が多く見られた。 １．単元全体を見通して、授業デザインをする教諭の増加。 ２．対話する場の設定を工夫する教諭の増加。 ３．ICT機器の効果的な活用を試行錯誤する教諭の増加。 ４．児童の対話する内容に、これまで以上に注目するようになった教諭は、児童への言葉かけに変化があった。 ５．教材の開発（裁判員制度、水遊びなど）が行われ、それらの実践をTeamsで共有することができた。 ６．「対話」をキーワードに、授業力向上に向けての校内研修の増加。 これらのことから、自分の考えを表現できる児童や根拠を比較できる児童が増加した。 ＜課題＞ １．教師のファシリテート力の未熟さ ２．対話に応じた構造的な板書づくり ３．対話に向かう児童の学習状況をいかに把握するか といった課題が見られた。今後は、今年度と同様に継続的な授業力向上の場づくりに取り組み、児童の学習状況を把握するための方法を模索していきたい。
		≪代表校園長の総評≫ 本研究は、「対話」を中心に協働的な学びへと展開するものであった。教員自身が研究教科を決め、教材を解釈し、児童へのアプローチの仕方を考え、実践を重ねることができた。「対話」を主軸として授業を構築していくことにより、児童が学習内容に対して問題意識をもち、学びを深めることができたといえる。また「対話」は、仲間とだけではなく、教員との対話、教材との対話、外部講師との対話、地域の方々との対話と3次元的に広げることができ、「対話」することの意味を考える研究となった。教員にとっては、協働的な学びが「対話」によって深まるという実感ができ、より「対話」を大切にした授業を考えるようになっている。多くの研修会、講師による指導から教員自身が「対話」を重ねることの重要性を学ぶ研究ともなった。